

2025. 10. 5 (日) 使徒27:1～12

- 27:1 さて、私たちが船でイタリアへ行くことが決まったとき、パウロとほかの数人の囚人は、親衛隊のユリウスという百人隊長に引き渡された。
- 27:2 私たちは、アジアの沿岸の各地に寄港して行く、アドラミティオの船に乗り込んで出発した。テサロニケのマケドニア人アリストアルコも同行した。
- 27:3 翌日、私たちはシドンに入港した。ユリウスはパウロを親切に扱い、友人たちのところへ行って、もてなしを受けることを許した。
- 27:4 私たちはそこから船出し、向かい風だったので、キプロスの島陰を航行した。
- 27:5 そしてキリキアとパンフィリアの沖を航行して、リキアのミラに入港した。
- 27:6 ここで、百人隊長はイタリアへ行くアレクサンドリアの船を見つけて、それに私たちを乗り込ませた。
- 27:7 何日もの間、船の進みは遅く、やっとのことでクニドの沖まで来たが、風のせいでそれ以上は進めず、サルモネ沖のクレタの島陰を航行した。
- 27:8 そしてその岸に沿って進みながら、やっとのことで、ラサヤの町に近い「良い港」と呼ばれる場所に着いた。
- 27:9 かなりの時が経過し、断食の日もすでに過ぎていたため、もはや航海は危険であった。そこでパウロは人々に警告して、
- 27:10 「皆さん。私の見るところでは、この航海は積荷や船体だけでなく、私たちのいのちにも危害と大きな損失をもたらすでしょう」と言った。
- 27:11 しかし百人隊長は、パウロの言うことよりも、船長や船主のほうを信用した。
- 27:12 また、この港は冬を過ごすのに適していなかったもので、多数の者たちの意見により、ここから船出し、できれば、南西と北西に面しているクレタの港フェニクスに行き、そこで冬を過ごそうということになった。

<説教>

使徒パウロは第3回伝道旅行を終えてエルサレムに着き、その神殿にいたときに、ユダヤ人たちによって捕らえられました(21章)。その後カイサリアに護送されて総督フェリクスに引き渡されたパウロをユダヤ人たちはなおも訴えました(23～24章)。それから2年が過ぎ、総督がフェストゥスに変わりました。そんな中でユダヤの王アグリッパの前で証し、説教をする機会がパウロに与えられました。アグリッパは決してキリスト者になろうとはしませんでした。しかし、パウロにはユダヤ人たちが訴えているような「死や投獄に値する罪」は何もないということがアグリッパやフェストゥスたちの間で認められたのでした(26:31-32)。それでもパウロは釈放されませんでした。何故ならパウロ自身がローマ皇帝カエサルに上訴することに決めたからです(25:11)。それでパウロは皇帝がいるローマに行くことになりました(25:12)。そうやってパウロはカエサルの前でも主イエス・キリストのことを証言(証し)するという主イエスから受けた使命、務め、責任(23:11)を忠実に果たそうとしたのです。勿論ローマ帝国皇帝の法廷ですからパウロが勝手に行くことはできません。続けてカエサルの支配下にあるローマ帝国の役人による保護、監察のもとに置かれて連れて行かれる必要がありました。

その役目を仰せつかったのが親衛隊のユリウスという百人隊長(27:1)でした。〈イタリアに行く〉とは勿論その中心地ローマに行くということでしょう。パウロは犯罪人ではありませんでしたが、ほかの数人の囚人と一緒に引き渡されました。

そんなパウロと行動を一緒にした教会の仲間は〈私〉と言っているルカ、そしてテサロニケのマケドニア人アリストアルコもでした。彼はかつてエペソでの「アルテミス騒動」のとき捕らえられたことがありました(19:29)が、その後もパウロに同行し(20:4)、そしてこの後ローマでパウロとともに囚人ともなった人です(コロサイ 4:10)。

乗った船は地中海の〈アジアの沿岸の各地に寄港して行く〉(2)ので、まずカイサリアの北にあるシドンに入港しました(3)。ユリウスがパウロに親切にしたのは、パウロが犯罪者ではなく、また皇帝に上訴した人間だったから、またローマ市民権を持っていたなどからでしょうが、もちろんそこには神の恵みがありました。

季節的に地中海では西からの風が強くなっていて、シドンから西に向かうと向かい風をまともに受けることになるので、それを避けるためになお北上してキプロスの島陰を航行し(4)、次に西に向きを変えて(これはアジア沿岸に沿って行く以上、仕方が無い。それでもキプロスのおかげで風は弱められたのだろう)、キリキアとパンフィリアの沖を航行して、リキアのミラに入港しました(5)。

ミラはイタリアとアレキサンドリアの貿易の中継地でした。〈ここで、百人隊長はイタリアへ行くアレキサンドリアの船を見つけ〉ました(6)。アレキサンドリアがあるエジプトは当時ローマ帝国への主要な穀物輸出国でした。この船にも麦が積まれていました(38)。

さてパウロたちを引き連れてローマに向かう百人隊長の計画はここまではおおそ思い通りで、日程も順調に進んでいました。しかしミラを出たところで文字通り「風向き」が怪しくなって来ました。風のせいで何日もの間、船の進みは遅く、少しでも風を避けようとしたのでしょうか、もう少しアジアの沿岸を進み、やっとのことでクニドの沖まで来ました。そして風のせいでそれ以上は西に進むことができなかったのも南に向かうことにし、サルモネ沖のクレタの島陰を航行しました(7)。

そしてクレタ島の岸に沿って進みながら、やっとのことで、ラサヤの町に近い「良い港」と呼ばれる場所に着きました(8)。この港は地形上、夏に安全な「良い港」でした。そして季節はそのとき夏は終わり、秋から冬に向かっていたのでした。

それでも風を避けようとかなりの時間この港に停泊していたのでしょうか。断食の日もすでに過ぎていました(9)。この〈断食の日〉はだいたい毎年9月の終わりから10月の初め頃に守られていた断食です。そして当時地中海では冬の嵐のために毎年11月11日から3月5日までは航海は中止されていました。更に3月5日から5月15日までと9月14日から11月11日まで〈航海は危険〉とされていました。パウロたちの航海は危険な期間に入っていました。

それで、パウロが発した警告は至極まともなものでした(10)。しかしそれは百人隊長にとってはいわば素人の言葉と聞こえたのでしょうか(11)、船長や船主の方を信用しました。彼ら〈多数の者たちの意見〉は「良い港」から100 kmほど離れたところにあるフェニクスに行ってもそこで冬を過ごすことでした(12)。

この場合、どちらの判断が正しかったかはこのあと直ぐに分かります。パウロの判断の方が正しかったということになりました。船乗りでもないパウロの判断は素人判断、プロ

の船長や船主の意見の方が正しいと百人隊長は考えたかも知れません。しかし百人隊長は知らなかったでしょうが、パウロはこれまでの伝道旅行の中で何度か船に乗ってきました。そして「使徒の働き」には記されていませんが、乗った船が難破したことが少なくと3回ありました(Ⅱコリント 11:25)。それで、パウロにも海の天候を見分ける知恵がついていたとも考えられます。だとすれば、それはパウロが主イエスを信じ、聖霊の導きに従って行動したことの良き結果とも言えます。神に従う者、イエスを証しする者にそういう、この世での生活に必要な知恵をも神が与えてくださるということと言えるでしょう。

しかしそれは単に風向きや危険を予測する知恵が与えられるというようなことにとどまりません。今日見て来たような文字通りの「逆風」の中で、パウロは落ち着いて冷静に健全に考え行動していましたし、この後もなかなか収まらない暴風、逆風、困難の中で、またパウロが警告したとおりになるいのちの危険の中で、パウロはなおも落ち着いて冷静健全に考え語り行動します。そしてともにいた人々のいのちが救われることになります。私たちが見るのは、そのように、主イエス・キリストを信じ、罪赦され、神の子として神に受け入れていただいた者パウロの、神への全き信頼です。たとえ〈多数の者のたち〉ではない、「少数者」であっても主イエス・キリストを信じて、神の子として神のみこころを求め、神に聞いて判断行動する者パウロが、そのときともにいた多数の者たちのいのちをも救い、彼らの益となったということです。もちろん、パウロをあわれみ、お救いになり、ローマにまで行ってイエスの証しをするようにお召しになった主イエスの、神の真実の故です。

神は私たちも、この世にあって、主イエス・キリスト信じる者、神の子としてください、たとえ少数者であっても、なおも今この世で生かしてくださり、神のためのそれぞれの働きに、地域に家庭に職場に学校において召してくださっています。その神の恵み、あわれみを覚えて神に感謝し、いっそう主イエスを信じ、神と神のみことばに聞き従い、神と人を愛し、神と人に仕える者でありたいと願い、一層の神のお恵みを祈り求めます。